

非人間的なものたちの生命線

阿嘉誠一郎『世の中や（ゆんなかや）』論

松田潤

一 はじめに

本稿では、七二年の施政権返還目前の沖繩を舞台に底辺労働者たちのストライキを描いた阿嘉誠一郎『世の中や（ゆんなかや）』を取りあげ、この小説が米軍統治期から返還後のポストコロナルな現在まで継続する新たな植民地体制と、その背後で忘却されてきた「外国人」問題に光を当てている作品であることを確認したい。その上で、『世の中や』が現代資本主義における「民族問題」の回帰を徴候的に描いてしまう限界を抱えながらも、この主体化⇨従属化の形式を突き崩していく介入的な読みの可能性に開かれていることを提示するのが本稿の目的である。

『世の中や』は、七五年（昭和五〇年）一二月河出書房新社の文藝賞を受賞し、翌七六年に同社より単行本として出版された。阿嘉誠一郎は三八年沖繩生まれ。自宅で電気設備設計に従事（当時）。『文藝』『海燕』誌上に数編の短編を発表している他、本名の赤嶺誠紀（精紀）名義で琉球王朝を舞台にした時代小説も出版している。『世の中や』は、七一年の復帰直前から七二年の復帰にかけて、アメリカ人の経営する小さな設計事務所でエンジニアとして働く仲里政吉の視点から、「世の中全体が騒々しく」「何かしら落ち着かないせわしい毎日」が続く会社内での様々な出来事が描かれる。

政吉の勤めるOAE（オーシャン・アーキテクト・アンド・エンジニア）は、韓国軍施設の変電所の電源装置や「オサン飛

行場の飛行機誘導装置や冷凍倉庫、軍宿舍、それから台湾の米軍将校クラブ、カテナ飛行場のエアメンズドミトリイのエアコンディションの設計等々」を米軍から請け負う民間の業者である。政吉が入社した七年前、会社は一号線（現在の国道五八号線）に面した今の場所ではなく、米軍施設の「キャンプ・クエー」（キャンプ桑江、キャンプ・レスター）^①の中にあった。当時はベトナム戦争の激化につれこの種の設計事務所もますます忙しくなっていた。「各セクションごとに十名から二十名ほどの人員が居り、また国籍や人種も多種多様で華やかな色彩をそなえていたものである。各セクションの主任はすべてアメリカ国籍の白人で、その配下の上位にフィリピン人や日本人などが居た。更に中位は韓国人や台湾人といったところで、沖繩人はそのヒエラルキーの底辺でひしめいて居る存在だった」。「人種の博覧会場」とも語られるこの会社のマネージャーのジュニアは、常に従業員の行動を監視し威丈高に振る舞っており、政吉は一年足らずで会社を辞めてしまう。それからは職を転々とし、最後には自宅でのアルバイトにいそんでいたがそれも続かず、妻の聰子からはしょっちゅう不平をこぼされていたところに友人の新川の誘いがあり、古巣のOAEに戻ることにしたのであった^②。

この復帰直前の七一年、沖繩では「全軍労の首切り反対のス

トライキ」が「米軍関係の職場ではどこでも」繰り返され、ベトナム戦争も末期になり、「アメリカという国は繁栄を通り越していま病んで」おり、「日本という国はすばしい狡猾さでいつの間にかアメリカに追いつこうとしている」^③、そのような時期である。政吉には復帰に伴い日本人になれることの「意味がまだよくわからない」^④。会社の各セクションの主任は日本人になったが、その下にフィリピン人と韓国人、最下層を沖繩人が占める構図は変わっておらず、日本人は沖繩人の三倍も四倍も高い給与を貰っている^⑤。七二年五月一日の復帰を境に問題となるのが、ドルから円への通貨切替えによる給与の計算方法をめぐる沖繩人従業員と会社の対立である。「民間の企業や官公署を始めとして小さな雑貨店の店員にいたるまで殆どが給料は三六〇円で換算されて」いるなか、一ドル＝三〇五円の固定相場が沖繩にも適用されたことに伴い、会社は沖繩人従業員の給与もそのレートで換算することを決定する^⑥。同じ系列会社のマーシー・コーポレーションが既にストに入ったことを聞きつけ、政吉らのOAEの沖繩人従業員一五人も団結し、韓国人の「全さん」を交渉の通訳に立て、組合を結成しストを決定する。要求通り三六〇円換算で給与は支払われることになったが、会社は裏で数字を誤摩化すことで基本給を減俸し勤務時間を短縮させた上に、ストから一月後四名を除くすべての沖繩

人従業員が解雇され物語は終わる。以上が小説の粗筋である。

二 沖繩文学における日本語と沖繩方言の配置^{エノノミ}Ⅱ配分

『世の中や』の文藝賞受賞は、会話文における沖繩方言の多用と当時の沖繩の状況や個々人の内面の描写が評価されたことによる。選考委員は、野間宏、島尾敏雄、小島信夫、江藤淳。野間は「この作者は、今後沖繩のなかに隠されている一切の問題を、さまざまな視点から、そして「本土」にはない言葉の使用法を意識的に操作して私たちのまに引き出し、日本とアジアの全体を照らし出す独特の力をそなえるようになる作家ではないか」とし、江藤は「島尾敏雄氏が沖繩方言の会話を、現地の発音で読んでくれたことが大きく貢献している。そういう潜在力を感じさせ、かつ事大主義的ないやらしさをあまり感じさせないという理由で」受賞を決定したと述べている。島尾は「アメリカ人、フィリッピン人、韓国人、本土の日本人、そして沖繩人などそれぞれへの作者の距離のとり方が、ほどよい位置からはずれることがなかった。〔……〕これは今の沖繩の状況をまるごとつかまえていると思え、読後に爽やかな文体の気配が感じられた」ことを評価している⁶⁶。

『世の中や』に限らず、施政権返還を前後してそれまで失語的

状況に追い込まれていた沖繩方言を文学作品に取り入れようとする試みが一つの傾向としてあったのは確かである。新城郁夫は、七〇年以降の沖繩文学が「日本語」（国語）の政治的専制へのカウンターとして「沖繩方言」を提示してきたことを一つの賭けとして見ており、その系譜として先導して六〇年代から小説・演劇分野で先駆的に沖繩方言を取り入れていた大城立裕の他、東峰夫の『オキナワの少年』（七二年芥川賞受賞）、阿嘉誠一郎『世の中や』（七五年）を挙げ、「それはダイアクロシア（二重言語）的状况の下、公的空間に於ける上位言語としての「日本語」によって書かれてきた沖繩の近現代文学という表現空間において、低位で私的な言語として抑圧されてきた「沖繩方言」を新たに編入していこうとする実験」と評している⁶⁷。

むろん新城はここで沖繩方言の復活を単に言祝いでいるのではなく、日本語―沖繩方言そして日本（人）―沖繩（人）という相互規定的な二項対立的磁場を「沖繩大和口」（日本語と沖繩方言が折衷された曖昧な俗語）の使用によって解体させる可能性を知念正真『人類館』（七六年）に読み込んでいる。

地の文は日本語、会話文には沖繩方言を配置する東以来の形式は、そのカウンターとしての機能の一方で新城も留保したように、ネイティブに期待される沖繩文学への役割（ローカリティの表象）を自ら演出して見せ、言語の同一性を本質化して

配置することで、日本—沖繩という諸ネイションをも「対—形象化の図式」^⑧に沿って想像的かつ実践的に立ち上げてしまう危うさに繋留されているのではないか。たとえば、ドルと円の交換で銀行の計算間違いからか余分に受け取った金を慌てて返しにしようとする「掃除とコーヒー沸し」の「久場のおばさん」と従業員とのやり取りにそれは端的に表れている。

「何すがやあ、大事なとうさあ！」とおばさんがひとり呟いていた。

「何が、何ぬ大事なとうさが？」と訊くと、

「ドル、円ぬんかい交換しいが銀行かい行じゃんよオ。銀行うてイ替えてイ、帰えてイ来やんてエ。あんし、なア一度読み直うちゃんよオ。やしが、計算ぬ合アらんどあんでエ」とのおばさんの返事だった。(……)

「人心配してみてイ、何やが、おばさん！ 金ぬ多さでエ、喜ぶんでイチどある。顔ン青くなてイ、何やんばあが！」と政吉が言うとうと、

「だああんせエ、計算ぬ違とうそうてイ」とおばさんは相変わらず青ざめた顔をしている。

「いいばあやさ！ うぬまま取とうけエ、おばさん。何ん心配やさんけエ！」

と宮城も茶化すように横からいった。

「うりが物いいしよオ。あんせエならんしが、世の中や！ 銀行困らんならんむん、だあまた行きわどやさ」(……)

「しかし、考えてみると、おばさんのような人間も、この沖繩には少なくなつたよな」と妙にまじめくさって新川がいった。

そこへ高倉竜治と大津俊造が遅れて入ってきた。おばさんが居ないのを知ると、

「ババアはどこへ行つたんだ。コーヒーもちゃんと準備しよらんで。いいかげんなババアだな、まったく」と大津俊造が喚いていた。

「油をうってやがるな！ 誠にしやがれ、あんなババア！」と高倉竜治も叫んでいた。

選評では「長すぎ」「平板」「単調な文章」「タイクツ」「小説的魅力に乏しい」とも評されているが、選考委員らは島尾が沖繩方言の会話部分を音読したことでこの小説の評価をがらりと変えており、「沖繩弁のところが、急に面白く見え」(小島)、「沖繩のなかに隠されている」問題をネイティブが沖繩方言で語るのを歓迎し(野間)、「現地の発音」から明示されることのない何かしらの「潜在力」を受け取るのである(江藤)。この

ような評価において日本語へのカウンターとして沖縄方言が機能しているとは言いがたく、沖縄方言は日本文学および日本語をなんら傷つけ損なうことなく、むしろその多様性を彩るローカルな文化として称揚されてさえるし、また作家の側も本土の文壇からの承認を請うために積極的に土着性を演出することで、日本語―沖縄方言の共犯的で安定した対立の磁場が形成されてしまっていると思えるのである。引用した会話部分では、正直で善良なネイティブの「沖縄人」像が大津や高倉といった横暴な「日本人」との対比において、方言を多用することで主体化されていると言えよう。

では、日本文学という領域の多様性を配分するための欲望に備給することなく、新城が言うような「日本と沖縄の見慣れた共犯関係の網の目を断ち切っていく」迂回路としての沖縄文学¹⁰の可能性は、いかにしてこの小説に見出せるだろうか。

三 米軍占領下における国際関係と「外国人」問題

『世の中や』について、次の岡本恵徳の指摘は重要である。岡本は、七二年の沖縄返還による通過切替えが生活に密接にかかわるだけにとりわけ大きな問題になったとし、さらに返還直前の「ドルショック」、すなわちニクソン政権によるドルと金の

兌換停止に伴うドル大幅切り下げが混乱に拍車をかけていた大きな沖縄の状況を映し出そうとした作品として本作を捉えた上で、以下のように述べている。「全軍労や公務員のような大きな組織ではなく、基地に依存する米国資本の小さな設計事務所を舞台に据えることによって、返還によって生ずるさまざまな矛盾の集約される場所から状況をとらえかえすことを試みたのである。さらにそういう舞台設定が、アメリカ、日本、韓国、フィリピン、というさまざまな国籍を持つ人々の間のかかわりや矛盾をうきぼりにすることを可能にしたし、沖縄返還問題が、沖縄対本土、沖縄対アメリカという関係にとどまらず、沖縄在住の外国人に及ぼす影響が少なからずあったということについての注意を呼びおこすものとなった」¹¹。

つまり『世の中や』は、施政権返還を目前にした基地経済体制の変容のさなかにおける擬似的階級体制下の労働環境と軍雇用員たちそして「外国人」に焦点を当てたことで、従来米国―日本―沖縄という垂直的・対立的な構図で説明されてきた沖縄返還問題および米軍占領下沖縄の植民地状況を相対化し、「矛盾の集約する場所」から状況を捉え直す視座を提示しているのである。この「矛盾の集約する場所」を規定する諸権力の網目のなかで小説そのものを再考し分析することで、軍事占領と資本主義を分離することなく、人種主義、民族／国民主義とも密

接に連累した共起性の事態として理解することが可能になるだろう。ここでは占領を可能にしていた当時の国際関係と米軍統治期の沖繩で「外国人」であることの意味をテクストに沿いながら問うことで、小説が開示している可能性とその限界も確認しておきたい。

当該期の沖繩をめぐる国際関係を考える上で、酒井直樹の次のような見解が参考になる。「国際的な支配と被支配の関係は、支配者⇨男性対被支配者⇨女性という構図を維持しつつ、恋愛関係の比喻によって最も集約的な表現をうることができる、といってよいだろう。国際恋愛を描く映画は、植民地支配のイコノグラフィ（肖像学）に明らかに属しているのである」^[13]。酒井は小説や映画に描かれる国際恋愛が外交関係や国際政治のアナロジーになっていることを指摘しているが、ここでは多国籍の労働者が働く米国資本の会社における男たちによる労働争議——女性の従業員も存在しているが、仕事の遅い使えない存在として描かれ、団体交渉にあたる政吉を含む組合役員の五人、通訳、雇用者はすべて男性である——を描いた物語もまた、国民、民族、人種の命運が仮託された比喻として読まれる必要がある。たとえば、交渉の通訳を喜んで引き受けていた韓国人の全宗達、政吉らがストを執行するに至ってからは露骨に態度を変え、通訳の際に会社側に回って食ってかかりだす。「何をいう

んですか！ みなさんは、みなさんのマネージャーも信用しないんですか！ 今はっきりとオーケーといったじゃないですか。それなのに、正式の文書にしないと信用しないなんて、それはあんまりひどいじゃないですか」^[14]。また、ストを開始した政吉ら沖繩人従業員に対して、日本人の高倉竜治は沖繩人にはスト権もなければ労働組合も無効だとうそぶき、政吉は次のように内省する場面。「いったい自分達が直面しているのは何だろう、と政吉はそこで一つの疑問が湧いてきた。ひょっとしたら、これは日本人対沖繩人の対決だと見做されてもやむをえないのではあるまいか。復帰した以上、自分達も高倉竜治等と同じ日本人になっていく筈である。しかしどうしてかそういう理屈を素直に受け入れることができないのだ。心の底で絶えず拮抗し合うものがある。それは、自分達は日本人である前にまず沖繩人であるという認識みたいなものである。復帰したら自分達も日本人だと割り切れることはどうしてもできない」^[15]。そして交渉はジュニアが強硬な姿勢を崩さず何度も決裂し、全宗達の懐柔で委員長の新川がストを解くことを約束してしまったことで、沖繩人の内部に亀裂が生じ始める。

最後までその場に残っていたのは、大嶺と松田と政吉、そして辺安和子の四人にすぎなかった。（……）

「どうしたのよ、みんなは。ストを続行するって決めたんで
はなかったの?」

と辺安名和子が呟いていたが、その声には何の力も感じられ
なかった。最後に大嶺が歯ぎしりしながらいった。

「僕たちは辛抱してきたんだよ、辛抱して。この気持、あんな
チョーシナーにわかってたまるもんか、なあ松田! 考
てみると、十年あまりもよくこんな会社に辛抱してきたよな。
ジュニアにはいじめられ、高倉や野沢や藤井みたいな連中か
らはバカにされ、それでもじっと我慢してきたんだよ。この
煮えくり返るような気持、あんなチョーシナーなんかにかわか
ってたまるもんか!」¹⁵

強権的なアメリカ人経営者、韓国人や沖縄人への侮蔑を繰り
返す高給取りの日本人、交渉の通訳を担当しながら裏切ってい
く韓国人、ストに突入する最下層にいる沖縄人労働者、これら
の男同士のホモ・ソーシャルな関係が男女の恋愛関係の比喩以
上にアジア太平洋地域の冷戦体制と施政権返還を跨いで再強化
される日米軍事同盟の分かりやすい比喩となっていることは明
らかである。酒井が新たな植民地体制と呼ぶ「国民国家に統合さ
れる」とは違った主権の現動化の形式¹⁶としての太平洋横断的
な植民地体制を構成する権力¹⁶は、まさにこの同盟体制によっ

て可能になっていたのである。

この軍事同盟の起源はサンフランシスコ講和会議における旧
安保と対日講和条約の成立に求めることができる。原貴美恵が
指摘しているように、日米同盟とは、米英ソの協定であったヤ
ルタ構想が歪曲され大西洋側で冷戦構造が激化し、アジア太平
洋地域では東西対立が「熱い戦争」に変わりつつあったさなか、
後者の地域で米国との二国間安全保障同盟体制が構築されてい
くなかで発足した「サンフランシスコ同盟体制」の謂いであ
る¹⁷。この新たな軍事同盟体制は、アジア太平洋地域の国々を
米国の対等なパートナーであるとの装いのもと衛星国家化し、
これらの国々の和解や接近を阻止し、紛争を助長することで、
米国(米軍)の覇権を強化してきた¹⁸。講和条約上には一切明
記されていない沖縄の「潜在主権」を吉田茂は「国民の名にお
いて多大な喜びをもつて諒承」¹⁹したが、主権国家同士のお
互に同盟を装うことで、衛星国日本の積極的な関与のもと米軍が
沖縄の施政権を掌握し統治下に置くことの合法性が確立された
のである。さらに施政権返還が軍事占領を妨げるどころか当時
盛んに議論された「本土の沖縄化」(在日米軍の行動自由化)へ
と帰結したように、新たな植民地体制は沖縄返還を機により強
化され、返還後のポストコロニアル状況の現在をも貫いている。
小説においても民族間の和解や接近は失敗し、憎悪を焼き付

けられながら対立が深まるのは、第二次世界大戦後の戦後処理が明確になされず、講和条約自体に埋め込まれていた「係争の種」が冷戦構造の中で着々と育っていったこととそのまま重なっていると言えるだろう。新たな植民地体制の下で国民国家の主権が後退化しながらも過剰に諸ネーションが主体化させられるという事態は、エティエンヌ・バリバルも分析しているように、国家主権がグローバル資本主義の趨勢によって解体を迫られながら同時に旧来の国民国家を単位とする敵対関係の構図が境界の内部で維持されることに起因している²⁰⁾。この敵対関係が境界内部で何よりもまず向けられるのは外国人とされた人びとであることは言を俟たないが、米軍占領期沖繩でこの問題はどうか生起していたのであろうか。

「米軍占領という継続中の植民地状況全体を問うことと、「外人」問題を切り離さずに同時に批判する方法を獲得するためには、植民地状況における「外人」の苦難に対する集団的な「忘却」のもつ意義を歴史的に検討することが求められているのではないだろうか²¹⁾。このように語る土井智義は、米軍占領期の領土所有権と施政権が一致していない「琉球列島」²²⁾に適用された「琉球住民」／「非琉球人」²³⁾という差別的な分断統治にもとづく主体編成を、フーコーの統治性の議論を援用しながら国民国家なき「植民地状態 (colonial state)」の沖繩

の「国家化」における人口の対象としての「国民」／「外人」編成の問題として、大東諸島の統治を検討する中で考察している。人口の水準としての主体化された「琉球住民」とそれを構成的に支える「人口の群れ」としての「非琉球人」という分割。すなわち、いかなる意味においても国民国家ではなかった「国家化」された沖繩で「外人」であることは、他国籍者のみならず、戦前から続く戸籍制度を「国民性」へと流用することで地域住民のなかからも「非琉球人」とされた人びとが出現したように、民族性といった本質的で実体的な差異に基づく分割ではなく、「権力知の内部自体において構成された」(フーコー) 統治における統治をうける側の分割を意味したのである。

『世の中や』は施政権返還に翻弄された「外人」を描いている点で先駆的であったと言えるが、しかし、小説の現在においていつの間にか姿を消している台湾人や、出稼ぎで多く流入していた奄美出身者といった最下層の「外人」²⁴⁾「非琉球人」が描かれないことを通して作品から排除されていることを見逃してはならない。七一年に中華人民共和国の国連安保理常任理事国入りによって国際社会から消失していく中華民国(台湾人)や(施政権返還後は日中国交正常化によって台湾と断行した結果、沖繩における女性を中心とした台湾人労働者は女性を

中心とする韓国人労働者に入れ替わった)、沖縄人の職を奪うとされさまざまな差別を受けていた奄美出身者は、小説の中でヒエラルキーの底辺の沖縄人よりさらに下層の存在であり、数の上でも無視はできない存在であったはずである²³。この「非琉球人」の非在化は、作者の意図をこえたところで戦後沖縄における外国人の経験に対する集団的忘却を因らざるも描いてしまっていると言えるのではないだろうか。施政権返還によって「琉球住民」／「非琉球人」という分断は「沖縄県民」／「在日外国人」という編成へと変わったが、『世の中や』は経済的な危機の創出によって人々が分断され、この対立がエスニックな差異に還元され国民性へと流用されると同時に、非琉球人は不可視化され、統治主体である米軍が後景化していく様子をまさに微候的に捉えている点において、逆説的に評価しようと考えられる。

次節では、沖縄人労働者たちの「労働力化」に焦点を当て、民族の主体化と資本の共犯関係について検討するなかで、資本からの脱出の(不)可能性を探りたい。

四 ポストコロナリアルな条件Ⅱ状況

米軍占領下の軍雇用員の法的地位や賃金体系についてまず確

認しておきたい。沖縄戦終結後、経済基盤は焼失し、主要な農地は接収され、住民は移動の自由が制限されていたなかで、基地運営のための労働力が必要とされたことが軍作業の始まりであった。軍作業員確保のために四七年五月に作られた特殊行政区域「みなと村」では当初あまりの賃金の低さ(二〇B円程度。四七年当時は一ドル〇五〇B円。民間賃金は軍作業員の三〜四倍)に欠勤者が続出したという。五〇年二月から恒久基地建设が始まり基地工事が本格化すると、米軍は軍作業員の賃金を三倍に引き上げ、この年だけで離農者を中心に三千人余が基地労働に転職した。ピーク時の五二年には六万七千人が従事した。

工事を請け負っていた本土建設会社の労働条件は極めて劣悪で、この頃から自然発生的に争議が起り、対応を迫られた琉球立法院は五三年七月、民法法による戦後日本の労働法規に準じた労働三法を可決した。しかし、米政府は九月の施行に先立って同年八月布令第一一六号を公布し、軍雇用員を労働三法の適用から除外してしまった。これによって沖縄の労働法は「民法労働」と「軍法労働」が混在する極めて変則的なものになった。布令一一六号は軍の被用者について次の四種に類別した。第一種…米政府割当資金から支払いを受ける直接被用者、第二種…非割当資金ⅡPX、クラブ、食堂、その他サービスマン機関とその期間運営する利潤から支払いを受ける、第三種…米国要員

の直接被用者＝洋裁士、庭士、運転手など、第四種…契約履行中の米国政府請負業者の被用者。施政権返還が決まった直後から米軍は従業員二千四百人の大量解雇を通告し、七六年まで毎年二千人以上、計二万人の首切りが行われた。特に第四種雇用員は地位の低さから労組を作ることもままならず（六六年七月時点で組織率一・六％）、米軍の請負業者が変われば労働者はたちまち解雇に直面した。六三年に結成された全沖縄軍労働組合（全軍労）の活動も第四種の待遇改善にかなりのエネルギーを注いだとされている²⁶。

しかしながら、第四種雇用の人々は一種雇用員に比べても賃金が半分程度で、賃金保障が確実ではないストに参加しては生活が立ち行かず、同じ軍雇用員とはいえない心理的隔たりは大きかったことが伺える²⁶。政吉らの雇用形態も米軍請負の第四種雇用員に属しており、迂闊なことをしてしまっただけで首切りになるか分からぬような地位に彼・彼女らはいたのである。取引先から呼び出され、政吉が日本人の上司である高倉竜治とともに車で向かう最中、取引先のゲート前ではストが決行されており、政吉は同じ沖縄人として応援したいという気持ちと同胞を裏切っているという罪悪感に引き裂かれるが、車を運転する高倉は何喰わぬ顔でゲートをくぐる。高倉はこう語りだす。

「それにしてもな、全軍労なんてのも、とんでもなくわせものだな。首切り反対、基地合理化反対なんていいながら、その同じ口で今度は基地撤去だの、反戦平和だの、アメリカは帰れなんていうんだからな、出鱈目もはなはだしいっていいよな。軍備縮小が始まりゃ、首切りだって当たり前だよ。もし基地に反対ならよ、始めから何も基地でなんか働かなければいいんだ。軍からちゃん給料を貰っていながら、基地撤去だの、アメリカは帰れというのは、まったく矛盾しているよな。自業自得なんだよ」

いや、違う。それは違う。そうではないんだ……といいかけて、喉元につきあがってきた言葉を政吉は押し戻した。その後、何を、どのように説明すればよいのだろう。言葉はさらに沢山あるような気がするが、自分の心を表現する言葉というのは、そう簡単には見付からなかった²⁷。

解雇撤回要求をしながら基地撤去を要求する矛盾を突かれ、それが矛盾ではないことを直感しながらも政吉には言語化できない。「解雇撤回闘争は基地の合理化と機能強化に阻止することを通して、基地撤去を容易にするための状況をつくり出し、そこから労働者の生活権を確立しようとしているのであって、けっして基地撤去要求と矛盾するものではない。それどころか、

解雇撤回闘争は、基地撤去闘争の現実的一形態なのである。いかえるならば、全軍労の解雇撤回闘争こそは、七〇年安保闘争の最先端部分を構成しているのである²⁸⁾。政吉の「喉元につきあがった言葉」を新崎盛暉はこのように明確に言語化していると言えるが、全軍労のストに全面的に賛同しながらも支援も参加もするこのできない最底辺の地位にある労働者の「喉元につきあがってきた言葉」は、日本語にも沖縄方言にも十全には配分できない情動を構成する言葉ならざる言葉として、その可能性とともに見て行く必要があるだろう。

この時期の全軍労では大量解雇反対に加えて特に労働条件の厳しかった第四種雇用員の離職者対策となっていた。全軍労内部の分裂や執行部三役の指令によるスト打ち切りによって全軍労の闘いは孤立していく中、政吉らのはじめたストは、全軍労加盟が適わなかったため全沖労連（全沖縄労働組合連合会）に加入したが組織的な支援を得ることもできず、隣のマーシー・コーポレーションの労組のような「赤ハチマキ」も「赤旗」も「支援旗」もましてや「闘争小屋」もないぎりぎりの状態であった。そのような中で挑んだ交渉において、ジュニアに頭ごなしに「キョウソウ、カテナイ！ ワカル？」と一蹴され、政吉は次のような考えに至る。

そのキョウソウという言葉聞いて、政吉はハッとしたり。そうだったのだ。

このキョウソウという認識が自分達沖縄人には欠けていたのではないか。ふと沖縄の古いことわざを思い出した。

〈意地ぬ出じらあ、手い引き。手ぬ出じらあ、意地引き〉
それが沖縄人にとっての一つの生き方だったのである。しかし今、そういう生き方ではもはや生きていけない時代にきてしまっているのではあるまいか。この現代の資本主義の世の中では全然通用しない筈の言葉が、この沖縄には依然としてまだ残っていたのだ。……自分たちがこの世の中を生きていることは、まさに競争なのである。競争するからには、まず相手に勝つことを考えなくてはならない²⁹⁾。

ここに至って「現代の資本主義の世の中」に生きていることを痛感した政吉であるが、「キョウソウ」という認識が欠けていた「沖縄人」という労働力の誕生は、近代日本社会における資本制の成立に遡って、さらにポストコロニアルな状況との連関において考える必要がある。

富山一郎は、「近代日本社会が沖縄人をいかなる回路で獲得していったか」について着目し、文脈依存的に存在する「沖縄人」というカテゴリーを、資本主義社会の問題として、「自由

な労働＝賃労働」が設定されたのちのプロレタリア化における支配と規律の問題として捉えている。つまり、沖縄出身者が立派な労働者＝「日本人」になろうとしたその瞬間から、「沖縄人」という標識により身体性を帯びた語らいや営みが監視され、恫喝を受けはじめ、沖縄の人間は身体性を摩滅させながら「資源的人格」を主体的に発揮し「労働力化」するのである³⁰。「日本人になること」の機制において沖縄人の労働力化を説明する富山のこの議論は、米軍占領下において日本（人）から切り離され「琉球人」になることを強制された沖縄人という労働力を考えるにあたっては更新されねばならない。ここでは「自由な労働＝賃労働」の保障の外部に留め置かれながらも資本に包摂される労働力を、ギャヴィン・ウォーカーのいう「民族問題」の回帰として捉え直したい。

ウォーカーは、「西洋マルクス主義」の「擁護」を試みるケヴィン・B・アンダーソンの普遍主義と、ローカルな種差性に資本への抵抗の源泉を見出そうとするディベッシュ・チャクラバルティの特殊主義の議論をどちらも退けた上で、自己増殖する資本のからくりについて次のように説明している。

資本はつねにローカルなものを創造し、種差を形成し、差異を体系的に蓄積する。その後、資本は自ら「土着で固有

の」ものであること、資本の機能が、そのローカル性に支えられていることを示そうとする。しかし、これは資本の根本的な畏である。資本は、これらの条件を利用して自己の展開に必要な前提条件を措定し、遡及的にその条件の存在を主張する。諸要素を種差的差異に閉じ込めることによって、つねに資本の円滑な機能に差異を動員できるような実践系が確立される³¹。

つまり資本主義は、自然化された仮想の「差異」の創造を通して、本来商品化不可能な労働力をあたかも資本主義的生産と共約可能なように見せかける相対的余剰人口の形成を導くような過剰を構成する。このような形式の多くは国家によって保証されており、人種主義に基づく植民地的差異を通じて国家は「民族／国民」の像を自らに与え自己を折り返して正当化し、資本の（見せかけの）円滑な機能に差異を動員する。また「民族（nation）」と「資本」は共に酒井直樹がいう意味の翻訳（分節化の社会的行為をつうじて二つの側が出現し、それがあたかも最初から存在したかのように見せかけるもの）の機制によって産出されるとウォーカーはサンドロ・メッツァードラを参照し述べている³²。このような現代資本主義理解において民族問題とはすなわち、

主体のイデオロギーと国家への服従とのズレを橋渡しするひとつの像としての民族／国民の機能であるからこそ、「情熱的で生きた形式」としてのその機能は、資本の「質的同一性」と「量的競争」のアマルガム化の「最初の実現」の場を明らかにする。民族問題は、国家を資本主義の公理の「実現のモデル」へと転換する、最初の引き手として機能するのである³³。

〈意地ぬ出じらあ、手い引き。手ぬ出じらあ、意地引き〉（＝怒っても手を出すな、手が出そうなら怒りを沈める）という言葉の想起によって、政吉が資本に算奪されていない領野としての沖繩（人）を想像し、一転して競争への参入の必要を痛感するとき、近代化＝日本人化の過程で喚起されると同時に規律権力によって消去されてきた「沖繩人」という「民族」の種差性が幻想され、米軍占領という新たな植民地体制下の現代資本主義において再び回帰しているとは言えないだろうか。つまり、「沖繩人」という民族的主体は資本と国家（軍隊）につねにすでに捕獲され商品化される労働力として遡及的に捏造されるのであり、政吉の独白はまさしくその徴候として読めるのである。

しかしながら、この資本と労働力の共犯的な結びつきは、

「資本の動態を阻害する（しかしそれでも可能にする）原初的境界」でもあるとウォーカーは指摘する。

この境界は歴史的世界に生ずる他の境界づけの形式を通じて浸透し、ねじれとともに拡散する。それらの形式を裏書きするとともに資本の「外部」へと差し戻しながらである。ポストコロニアル研究は、ポストコロニアルイズムの内破の後に、この「逆説的」外部——（その「境界」は純粋な回路としての資本の運動の内部に引かれるので）けっして純粋な外部ではないけれども、社会生活につねに存在する潜勢力の底流である外部——の政治的把握にとって重要であり続けている³⁴。

ウォーカーが可能性を見出すメッザードラの言うポストコロニアルの条件＝状況（condition）における問題とはすなわち、「仮想の差異が近代世界のある図式に即していかに用いられ、調整され、展開されるのかということ」であり、「歴史的物象化が世界的規模での資本の展開に不可欠な部分をいかに構成するかについて」提示することである。この地平において、ポストコロニアルの条件の政治性は、「われわれ」や「彼ら」を主体とする領土的主体化の「凝集の暴力」を拒否し、「同一性（アイデンティティ）の形態をこえた新たな共（commonality）

を想像することができる」³⁵⁾。では、ポストコロニアルな条件
Ⅱ状況における逆説的「外部」であるような資本の外部への逃
走Ⅱ闘争を、資本と労働力との境界において見ていきたい。つ
まりウォーカーやメッザードラの言う、「質的同一性」の境界
をゆるがすような、もう一つの動態的な逃走Ⅱ闘争線があるな
らば、それは復帰前後の沖繩における「生命線」の明滅として
あったのであり、これをめぐる運動と文学においてこそ「新た
な共」があったと言えるからだ。

五 生命線からの闘い

川満信一は、全軍労働争の沖繩思想史上における重要性につ
いて、「生命線からの闘争」だったことを指摘し、こう述べて
いる。「死と生の境が生命線であり、貧困と豊かさの境が生活
線である。〔……〕生活線の闘争には、賃金をあげよ、転業、
転職を保証せよなど一定の余裕がある。しかし生命線での抵抗
には、余裕が残されていない。全軍労働争の核には、退くこと
のできない「生命線」からの抵抗があった。それが闘いを激し
いものにしたとみている」³⁶⁾。この「生命線からの抵抗」とし
て川満が可能性を見いだすのは、全軍労働の先鋭部隊でありなが
ら後に組合執行部との運動方針の違いから孤立していく「牧港

青年部」(通称牧青)である。牧青が七〇年二月四日に結成さ
れた背景には、六九年十一月の嘉手納空軍基地における戦略爆
撃機B52墜落事故をめぐって超党派で準備されていた二・四ゼ
ネストの挫折がある。このゼネストの挫折を乗り越えた労働運
動の展開を目指そうとし、それがベトナム戦争への加担を拒否
したいという「反戦」への訴えへと結実したことで、牧青は誕
生した³⁷⁾。また同年三月、組合活動を理由に解雇された全軍労働
反戦青年委員会のリーダー太田隆一が、「労働者は死んではな
らない、死すべきは基地だ」と訴え牧青を含めた全軍労働青年部
も太田の解雇撤回闘争を展開していったのは、同月解雇された
軍労働者であった女性が自殺をはかった事件がきっかけとなっ
ていたこと³⁸⁾も見逃してはならない。この女性の自死は統治性
における死の権力の発動による他殺として、あるいは故郷で客
死した「戦死」としてみなす必要があるのではないか³⁹⁾。

解雇撤回と基地撤去を同時に主張することの矛盾を指摘する
声は絶えずあったが、牧青が先鋭的に主張していた「解雇撤回
基地撤去」闘争は、「労働者は死んではならない、死すべきは
基地だ」という敵命を掲げることによって「生存」思想⁴⁰⁾となり、反
戦・反軍事主義の闘いの拠点となっていたと言えるだろう。そ
れは賃上げや退職後の身分保障を請願する生活保障要求のよう
な条件闘争には限定されないまさに生死を賭けた「生命線から

の闘い」であった。交渉という回路を拒絶し、自らの労働の場の撤去を叫ぶ闘争は、労働力の再生産を不可能にする点で牧青を資本、軍隊、国家によって捕縛できない（非）労働力へと変成させ、資本の動態を阻害する原初的境界を刻印せずにはおかないのである。そして以下のような政吉の回想を読むとき、孤立していた政吉ら沖縄人従業員の闘いもまた牧青の闘いと同様に「生命線からの闘い」であったことがうかがえる。

組合設立後、会社との交渉が難航しストライキを決する直前においては、政吉は会社での過去を「蚤や虱でも潰すみたいに潰されてきた時間の遺骸の集積」とみなし、自らの人生の喪失を「穴ぼこだらけの蜂の巣」に喩えていた。

そこで、ある荒涼とした風景画が政吉の胸の中に浮かんできた。それは石ころだらけの荒野の中に一本の枯れ木が突き立っている絵である。枯れ木の周囲には緑の草木の影は一本もなく、ただ灰色の土塊、石ころだけが果てしなく颯々と拡がっている。その枯木の細い枝に蜂の巣が一つぶらさがっている。蜂の巣は風でも吹けば吹っ飛んでしまいそうな頼りない形で枯木の枝にくっついている。その穴ぼこだらけの蜂の巣に、政吉は自分の人生を見る思いがした。「……」しかし蜂が死に絶えた今、後に残ったものは屈辱の詰まった穴ぼこ

だらけの蜂の巣の残骸だけではないか。とりかえしのつかないことをしてしまったような喪失感と悔悛がふと政吉の胸の中を掠め過ぎた⁽⁴⁾。

累々と転がる石、土塊、枯木、蜂の巣の穴、そしてそれらが絵画としてイメージされるに至って、政吉の生は物質的な知覚へと接近しだす。ジャン・フランソワ・リオタールは、『非人間的なもの——時間についての講話』において、人間的なものとは非人間的なものの痕跡を宿す存在であり、非人間的な位置から照射することによって人間的なものの姿が見えてくることを論じている。その上で、非人間的であることを、「発展」というイデオロギーのもと強固となりつつあるシステムの非人間的性と、きわめて内密の魂を捉えている非人間的性——幼児期の未決定性、時間、無意識、物質等——の二つの種類に分け、前者の非人間的性への抵抗について次のように述べている。「この種の非人間的なものに対する抵抗のほかに、「政治」として何が残っているだろうか？そして、抵抗するためには、その中であらゆる人間が生まれ、また生まれ続けているところの、惨めでもすばらしい未決定性によって、つまりはもうひとつの非人間的なものによって、人間が引き受ける負債のほかに何が残っているだろうか？」⁽⁴⁾。過去の時間を喪失し、物質的な知

覚へと自らを投企することで非人間的なものへ接近していく政吉の位置から、「人間的なもの」の姿を問い直すことが可能になるのではないだろうか。すなわち、ここでは政吉らの闘いを非人間的なものたちからの負債に賭けられた抵抗の政治とみなすことで、それが人間性をめぐる「生命線からの闘い」であったことを捉え直したのである。

従ってストライキに突入してからの次の想起は重要である。

自分も活動的に土地闘争や復帰運動に参加してきたとは政吉も思っていない。むしろ世の中の動きに絶えずびくびくしながら、社会の片隅で縮こまって生きてきたのがこの自分なんだと政吉は思っている。そんな臆病者の自分でも、しかしいま、自らすすんでストライキに参加せずには居れなかったのだ。どうしてあえてストライキなんか起こしたのか……その理由は単に給料を三六〇円で換算することだけを要求したのではなくて、その奥底にはもっとほかに諸々の原因があったような気がする。

例えば、ジュニアの沖繩人に対する露骨な侮蔑的態度をとってもそれは言えるし、また、高倉竜治の欺瞞に満ちた独善的態度をとりあげてもそれはいえるのだ。そういう彼等に対し今一度、人間としての反省を求めんが為に自分達はこうし

て起ち上がったのではないかと。自分達のストライキの目的も、とどのつまりその辺にあるのではないかと政吉は思った^④。

人間の扱いをされてこなかったいわば底辺でひしめいていたものたちが、労組や政党の後ろ盾もないままに、生命線を脅かされながら人間とされているものたちに「人間としての反省を求めろ」という態度は、人間性をめぐって「理念の氾濫」を引き起こしている。もちろん政吉ら沖繩人従業員のアライキは、反戦の訴えも基地撤去の主張も備えているわけではないので、牧青の闘いと同列には語れないし、さらに抑圧されていた「非琉球人」の存在は不可視化されたままである。しかし、第四種雇用という米軍の下請業者の劣悪な雇用下で、「社会の片隅で縮こまって生きてきた」政治的な活動とは無縁だった政吉が、「自らすすんで、ストライキに参加せずには居れなかった」と語るように、この作品は沖繩社会で周縁化されてきた人びとの政治的主体化の可能性を描いており、また自らの存在と生の保障を求める運動が開始されている点で牧青の闘いと共鳴していると言えよう。

重要だと思われるのは、この政治的主体化が「／＼せずにはいられなかった」といった何かに駆り立てられるような受動性の情動の領域に関わって遂行されていることである。それはまた

高倉竜治に解雇撤回基地撤去の矛盾を突かれたときに政吉の

「喉元につきあがってきた言葉」が言語化不可能な情動を構成していたことも連累している。突き動かされるような受動性情動、そして日本語にも沖縄方言にも十全には配分できない情動の身体への到来は、人間的なものの能動性を括弧に入れることで、労働力化された非人間的なものたちの資本との円滑な結びつきに内側から亀裂を入れながら民族という形象の回帰を突き崩し、原初的境界を刻印しないではおかない。

この境界を複数化し、分断を強いる境界線に抗い、線を結びなおしていくこと⁴⁾。この運動の始まりにおいて資本や軍隊やそれらの強制する非人間性は阻害されると同時に、同一性でも

なければ相互共犯性でもない非人間的なものたちの新たな「共^{コモス}」の地平にむけた探求が生じしだしている。

沖縄の施政権返還と通貨切替えという世代わりに焦点化したこの小説作品が徴候的に描き出してしまうのは、人種、ネイション、階級、ジェンダーの分断の見慣れた形式の限界であり、「非琉球人」の忘却であった。しかしその形式を逃れていく共同性の可能性もまた同時に「非人間的なもの」たちの生命線の明滅として開示されている。『世の中や』はポストコロナアルな状況の現代の沖縄にも通じる労働力化と「民族」化の桎梏の乗り越えを、決して実体化された外部ではない「外部性」とも言うべき境界において志向し続けることで試みているのである。

註

(1) 北谷町の東シナ海に面した平坦地にある米軍基地。米軍はキャンプ・クエ(Camp Kue)と表記。占領時は米軍政本部や娯楽センター、レストランなどの大きな施設が置かれ、現在も海軍病院、各種宿舍、学校、サッカー場等が存在する。沖縄大百科事典刊行事務局編『沖縄大百科事典』上巻、沖縄タイムス社、

一九八三年、八七一頁、「FAC6043 キャンプ桑江」、沖縄県ホームページ(二〇一四年八月二六日付)〈<http://www.pretokinawaip/site/chijiko/kichitai/1201.html>〉を参照。
(2) 阿嘉誠一郎『世の中や』河出書房新社、一九七六年、一三一―一九頁。
(3) 同右、三〇頁。

(4) 一九五五年に米島した国際自由労連調査団は、軍雇用員の賃金は人種差別賃金であるとし、是正を勧告した。調査団の報告によれば、時給最低賃金は、米国人一・二〇ドル、フィリピン人〇・五二ドル、日本人〇・八三ドル、沖縄人〇・一〇ドルとなっており、米国人と沖縄人の間では一〇倍以上の賃金格差があっ

た。全駐留軍労働組合編『全軍労働・全駐留沖繩運動史』第一巻、全駐留沖繩地区本部、一九九九年、二九—三三頁を参照。

(5) 一九七一年八月のニコソン声明後の変動相場移行に起因するドル下落、復帰に伴う通貨交換による沖縄経済への影響については、琉球銀行調査部編『戦後沖縄経済史』琉球銀行、一九八四年、一〇七—一一三頁を参照。

(6) 「選評」、『文藝』第一四卷一一五頁、河出書房新社、一九七五年、一四八—一五二頁。
(7) 新城郁夫『沖縄文学という企て——葛藤する言語・身体・記憶』インパクト出版会、二〇〇三年、六七頁。

(8) 「対」形象化の図式という用語で、私は、日本対西洋といった比較の枠組みが、本能的には想像的なものであることを言いたい。「……」形象は一方で感覚的な像であると同時に人の行動を促す点で実践的である。「……」ここで強調したいのは、形象への欲望は、ひとつの形象に向かって一元的に展開するのではなく、他の形象との対比を含みつつ、空間的に展開する点である。「……」日本の独自性の強調は西洋への模倣の欲望に裏打ちされているのでなければならなかった。酒井は対「形象化」の図式についてこのように説明した上で、それが翻訳の実践系（ひとつの言語から他の言語への対照的な変換を維持するイデオロギー）と相互促進的な関係にあることを酒井は指摘している（『日本思想という問題——翻訳と主体』岩波書店、一九九

七年、五三頁）。

(9) 阿嘉『世の中や』、八三頁—八五頁。
(10) 新城『沖縄文学という企て』、九頁。

(11) 岡本恵徳『現代文学にみる沖縄の自画像』高文研、一九九六年、一九八—一九九頁。

(12) 酒井直樹『日本／映像／米国——共感の共同体と帝國的国民主義』青土社、二〇〇七年、二五頁。

(13) 阿嘉『世の中や』、一七〇頁。

(14) 同右、一四七頁。

(15) 同右、一九三頁。

(16) 酒井直樹『希望と憲法——日本国憲法の発話主体と応答』以文社、二〇〇八年、二二—二三頁。

(17) 原貴美恵『サンフランシスコ平和条約の盲点——アジア太平洋地域の冷戦と「戦後未解決」の諸問題』溪水社、二〇〇五年、一六頁。

(18) 同右、二〇頁。

(19) 「サンフランシスコ平和会議における吉田茂総理大臣の受諾演説」、外務省編『平和条約の締結に関する調書Ⅶ（復刻版）』巖南堂書店、二〇〇二年、一一八頁。

(20) エティエンヌ・パリバル『主権論序説』、『ヨーロッパ市民とは誰か——境界・国家・民衆』松葉祥一、亀井大輔訳、平凡社、二〇〇七年、三四—四〇頁。

(21) 土井智義『米軍占領下における「国民」／「外国人」という主体編成と植民地統治』、『沖縄文化研究』第三八号、法政大学沖縄文化研究所、二〇一二年、三八六頁。

(22) ここでいう「琉球列島」とは、現在の鹿児島県十島村に相当する北緯二十九度から三〇度にひろがるトカラ列島が一九五二年十二月五日に日本に返還され、一九五三年一月二五日に奄美大島が返還された結果成立した現在の「沖縄県」に相当する区分である。

(23) 一九五三年に公布された布令第九三号「琉球列島出入管理令」では、「琉球列島居住者（琉球人）」の定義について、(一)一九四五年九月二日以前から引き続き北緯二十九度以南の琉球列島に居住した者、(二)「琉球籍」を持つ者、(三)一九四五年九月二日以降永住の目的をもって琉球列島にはいることを副長官により許可された者又はされる者としていたが、第一二五号「琉球列島出入管理令」(一九五四年)では、「琉球籍」を有し且つ現在琉球列島に居住している者と変更された。この範疇から除外された人びとが「非琉球人」として規定されたのである。この変更によって「非琉球人」とされた人々は、戦前から居住する「琉球籍」のない人びと、在沖奄美出身者（奄美は一九五三年一月二五日に本土「復帰」し鹿児島県となったため米国民政府は同年一月二九日指令第一五号「奄美大島に戸籍を有する者の臨時登録」を発し、戦後來沖した多くの奄美出身者は臨時外国人登録を行い、その後正規の外国人登録証を取得した）である。

(24) 一九五〇年代中頃に四万人を超えていた軍作業員のうち、約一万三千人は奄美出身者とさ

れていた。一九六五年制定された「非琉球人の雇用に関する規則」によって、非琉球人の雇用は琉球人労働者の技術向上を助成する目的の一方で、労働市場を圧迫しないよう調整する必要があるとされ、琉球政府労働局の審査を経て許可されていた。中野育男「米軍統治下における職業紹介」、『専修商学論集』第八七号、専修大学学会、二〇〇八年参照。奄美出身者への就職差別から仕方なく基地労働に従事したことの証言として沖縄タイムス中部支社編集部編『基地で働く——軍作業員の戦後』沖縄タイムス社、二〇一三年、一八七頁を参照。

(25) 『全軍労・全駐労沖縄運動史』、八一―二五、一三七―一三九頁。

(26) 四種雇用員に限らず、身分保障のない低賃金の労働者が全軍労のビケをすり抜け「スト破り」をしたり、後ろめたさや内心は参加したい気持ちを抱えながらも職責を放棄できず組合活動からは距離を置いていた人々の証言がある。『基地で働く』、四四、一三六、一五五頁を参照。

(27) 阿嘉「世の中や」、二七頁。

(28) 新崎盛暉『未完の沖縄闘争』凱風社、二〇〇五年、三九五頁。

(29) 同右、一三二―一三三頁。

(30) 富山一郎『近代日本社会と「沖縄人」——「日本人」になるといふこと』日本経済評論社、一九九〇年、序章および終章を参照。
(31) ギャヴィン・ウォーカー「現代資本主義にお

ける「民族問題」の回帰——ポストコロニア研究の新たな政治動向」、葛西弘隆訳、『思想』第一〇五九号、岩波書店、二〇一二年七月、一三〇頁。

(32) 同右、一三九―一四一頁。

(33) 同右、一三一―一三三頁。

(34) 同右、一四二―一四三頁。

(35) 同右、一四三頁。

(36) 川満信一「生命線からの闘い——全軍労闘争の記録」、『全軍労・沖縄闘争——比嘉豊光写真集』出版社 Manga、二〇一二年、三二三頁。

(37) 水島満久、新垣健一、宮城盛光（「インタビュ」）『牧青』を語り継ぐ——あの頃、そして現在』、『全軍労・沖縄闘争』、三三四―三五五頁。

(38) 沖縄県反戦青年委員会編『全軍労反戦派——基地解体の拠点』三一書房、一九七〇年、一七―二二頁。

(39) 軍事占領下における自殺の他殺性について、次の論考を参照。新城郁夫「故郷で客死すること——『中屋幸吉遺稿集』名前よ立って歩け」論、『国際沖縄研究（IJOS）』vol.32、国際沖縄研究所、二〇一二年。

(40) 金武湾への石油備蓄基地反対闘争を沖縄戦体験に裏打ちされた「生存」思想として描き出した上原こずえ「民衆の「生存」思想から「権利」を問う——施政権返還後の金武湾・反CTS裁判をめぐる」、『沖縄文化研究』第三九号、法政大学沖縄研究所、二〇一三年

を参照。

(41) 同右、一三〇頁。

(42) ジャン・フランソワ・リオタール『非人間的なもの——時間についての講話』篠原資明、上村博、平芳幸浩訳、法政大学出版局、二〇〇二年、九―一〇頁。

(43) 阿嘉「世の中や」、一五四頁。

(44) 東琢磨は、リオタールを参照しつつ、幽霊の現れない広島における非人間的もののフィギュールや、震災と原発事故後の「被災地」をめぐる境界線に抗い線を結びなおしていくことの可能性について考察し、次のように述べている。「こうした境界群はいかようにも人と人のあいだを縫いながら巻き込んでいくようなものとしてある。このいくつもの、動き続ける境界を、じっと見据えると同時に、そうした新たに入びとを分かちつ境界とは別の人と人、場所と場所を新たに結ぶ、あるいは結びなおして線を、自らが動きながらつくってあげていくことが可能を試していくこと。いま、広島で東北を想うことは、亡くなった方々を想い、今も苦闘する人びとを想うことであることはいままでもない。しかし、それだけではなく、広島で消されてしまったことを語りなおすことであり、沖縄や、水保や、さまざまな土地や人びとの記憶と重ね直していく作業であるかもしれないと考えている」。東琢磨『ヒロシマ・ノワール』インパクト出版会、二〇一四年、一七七頁。